

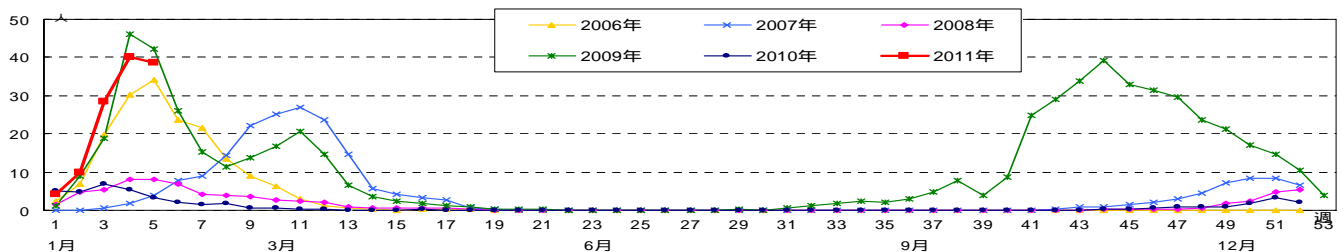
横浜市インフルエンザ流行情報 6 号 (第 5 週)

横浜市健康福祉局健康安全課 / 横浜市衛生研究所

トピックス

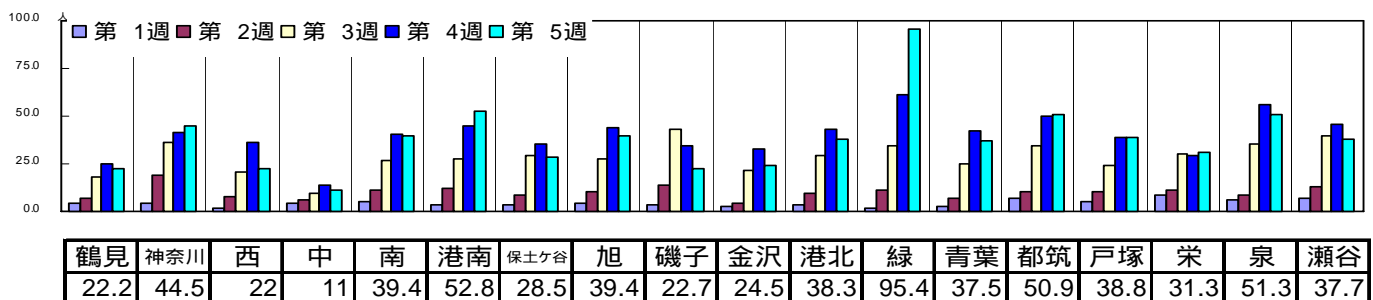
- ・ 第 5 週(1 月 31 日からの週)で、市内の定点当たり 38.76 でした。ピークは一旦過ぎたと思われませんが、重症例の報告も見られますので引き続き注意が必要です。
- ・ 市内の迅速キットでの結果は、A 型 3856 件、B 型 827 件と 8 対 2 の状況です。A 型が減少傾向ですが、B 型は第 2 週から連続して毎週倍増しています。
- ・ 年齢層内訳では、6 割以上が 10 歳未満です。
- ・ 施設閉鎖は、第 1 週、第 2 週ではゼロでしたが、第 5 週では 73 施設、1845 人です。

1 市内 150 か所(小児科 91 内科 59)の定点医療機関からの報告で、第 50 週(12 月 13 日～19 日)に「流行のめやす」である「定点あたり 1」を越え、第 5 週(1 月 31 日～)では定点あたり 38.76 でした。



2 行政区別状況

13 区が減少に転じています。流行状況は、定点医療機関の受診した患者数を持って判断しているために、各区の医療機関の偏在、交通機関等アクセス状況、昼間人口の年齢構成等が影響します。各区の住民の罹患状況を直接反映するものではないことにご注意ください。

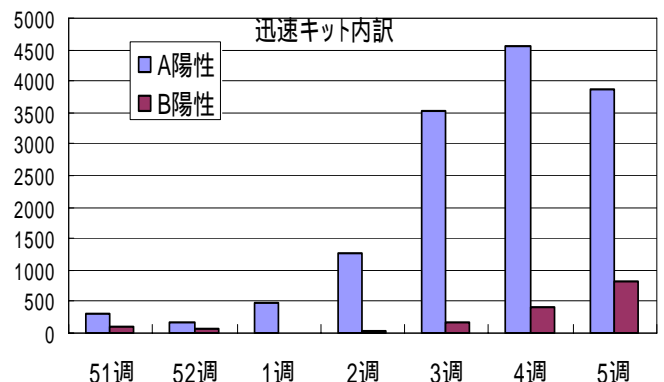


3 迅速キット内訳

現時点での市内流行状況は、A 型が未だ優勢とは言え、減少傾向です。B 型の割合は、第 52 週までは、市内の 3 割を占めていましたが、第 2 週では 2%、第 3 週では 4%、第 4 週では 7%、第 5 週では 18%と増加傾向です。中区、南区、緑区では B 型は 3 割を超えています。

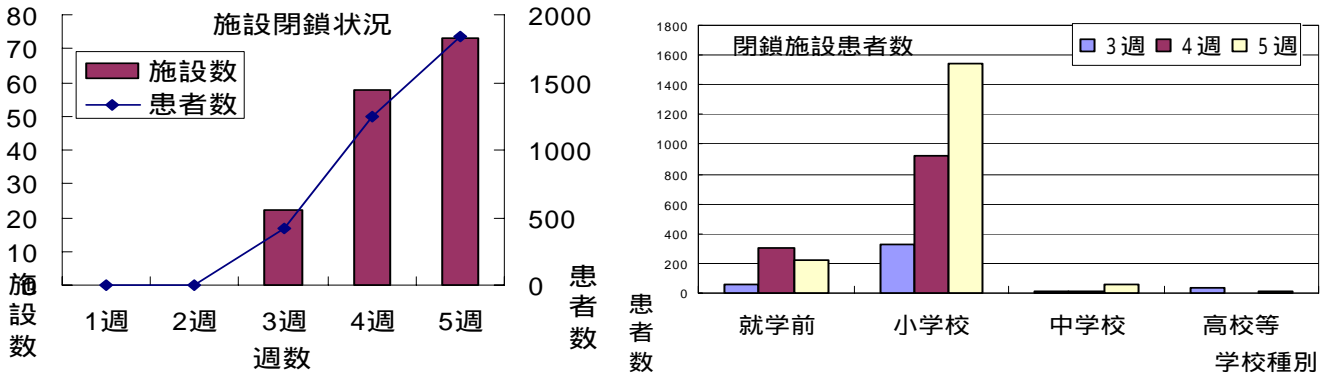
このままのカーブが維持されまると、第 10 週前後に A 型と B 型の割合が逆転します。

1 月 28 日の WHO の集計では、北米は A 香港と B 型、英国は A 新型が下がって中国は A 新型と B です。各国の B の勢力を見ても、通常の年のように、シーズン後半に B が流行してくる可能性があります。引き続き、今後の B 型の動向に注意が必要です。



4 施設閉鎖状況

第1週、第2週の報告はありませんでしたが、第5週では、73施設、患者1845人と急増しています。
 第4週の患者報告の内訳を見ると、83%が小学校、12%が就学前施設と、比較的低年齢層が主となっています。

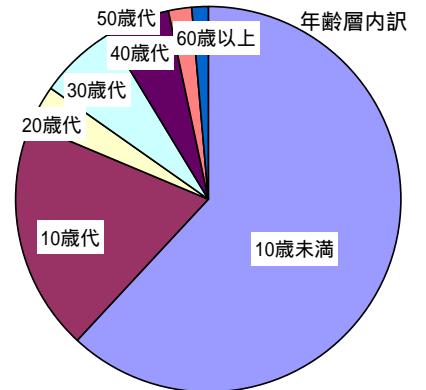


5 年齢層別集計 第5週では、10歳未満の割合が61%です。
 20歳未満の割合が81%となっています。

6 病原体検出状況

(全国) 平成23年1月では、A新型が1816件(81.6%)、A香港が346件(15.6%)、B型が63件(2.8%)です。

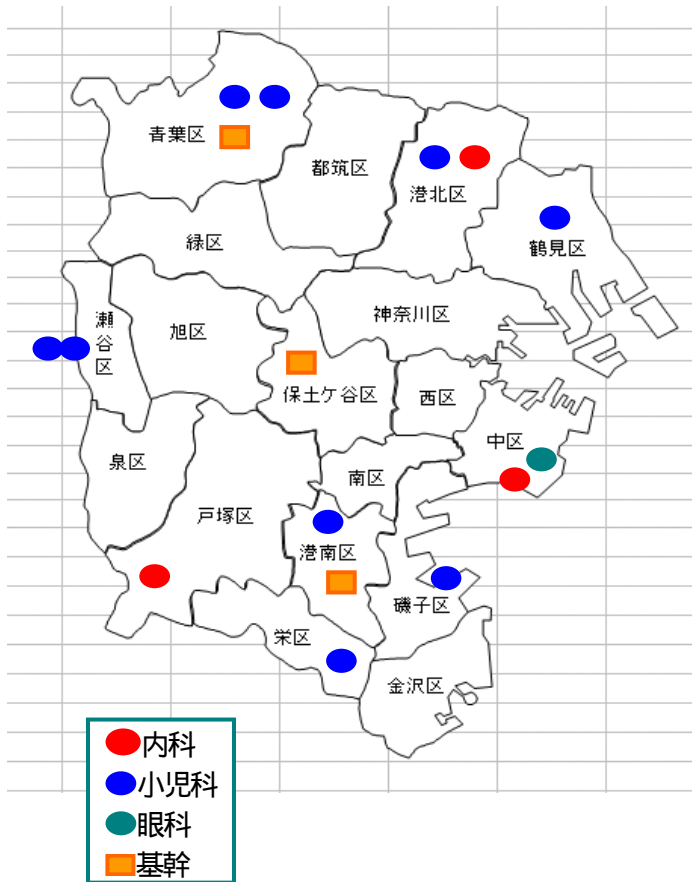
(横浜市) 平成23年1月では、A新型が14件(74%)、A香港が5件でした。



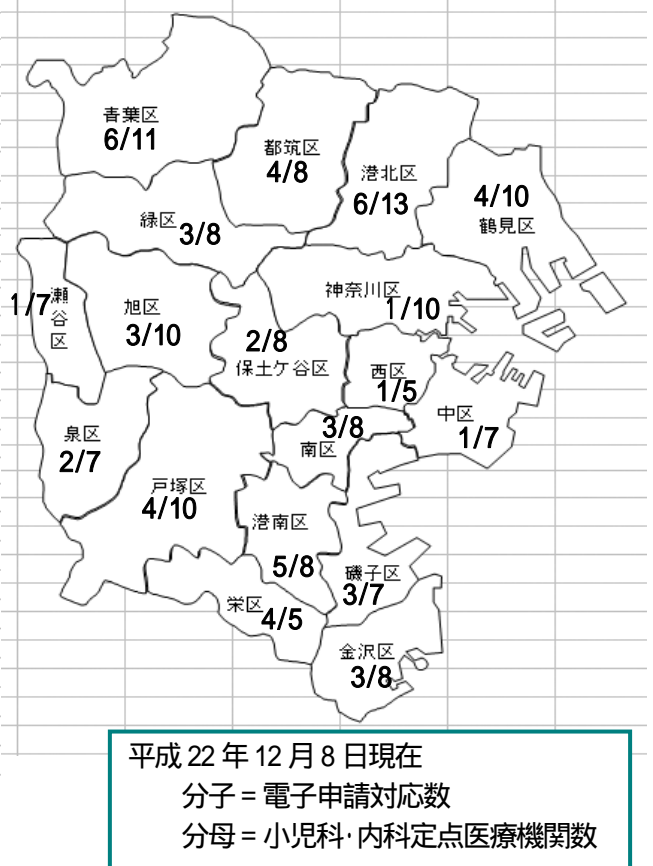
7 耐性株情報

今シーズンは、2月3日では全国で494株が検査され、うち11株(2.2%)に薬剤耐性が見られています。タミフル投与後が5件、ラピアクタ投与後が1件、未投与が6件です。

8 病原体定点分布図



9 定点医療機関報告種別(電子/インフルエンザ全数)



平成22年12月8日現在
 分子 = 電子申請対応数
 分母 = 小児科・内科定点医療機関数

お問い合わせ先

横浜市健康福祉局健康安全課 045 (671) 2463
 横浜市衛生研究所 感染症・疫学情報課 045 (754) 9816
 横浜市衛生研究所 検査研究課ウイルス担当 045 (754) 9804